

BOOK REVIEW

Sociocultural Significance of Whaling for Iñupiat People in the Contemporary Alaska

(現代のアラスカにおけるイヌピアットの人々
にとっての捕鯨の社会文化的意義)

Reviewed by Yuka Mizutani*

BOOK REVIEWED: Chie Sakakibara. *Whale Snow: Iñupiat, Climate Change, and Multispecies Resilience in Arctic Alaska*. Tucson: The University of Arizona Press, 2020.

著者の榊原千絵は、米国に拠点を置く研究者である。アラスカに生きる諸先住民族の中でも、榊原が調査対象としてきたのは、北部に居住するイヌピアット (Iñupiat、単数形はイヌピアック [Iñupiaq] ¹⁾) である。榊原は、2004年より、彼らが多く暮らすアラスカ最北の町、ウトキアグヴィク (Utqiagvik、旧称バロー [Barrow]) を繰り返し訪問してきた (xviii 頁)。巻頭の謝辞によれば、榊原に様々な助言を与えたイヌピアックの Martha Aiken は、研究者が現地の知識や情報を搾取する形で調査を行い、用事さえ済めば去って行く状況を憂慮していた。そして榊原には、成果を得た後にも姿を消さないよう約束してほしいと述べた上で、彼女の調査によってイヌピアットの人々は一体何を
得るのか、即ち、コミュニティには何が還元されるのか、と尋ねた (xx-xxi 頁)。Aiken が榊原に望んだ成果の還元方法は、金銭的なものではなく、研究を通じて社会正義を推進し、次世代の育成に尽力することであった (xxi 頁)。イヌピアットの事例を通じて、環境や文化と

* 水谷 裕佳 Associate Professor, Center for Global Education Discovery, Sophia University, Tokyo, Japan.

いった重要な事項が論じられた本書は、榊原と Aiken の約束が具現化したものだとも言える。

クジラと人の関係性や気候変動といったテーマを取り上げつつ、本書を通じて榊原が描いたのは、伝統的な価値観を基に変化を続ける、現代のイヌピアット社会である (xvii 頁)。また、本書で挙げられる事例は、上述したウトキアグヴィクに加え、榊原が第二の調査地と呼ぶポイント・ホープ (Point Hope、別称ティキガック [Tikiġaq]) をカバーしている (8 頁)。そして本書は、マルチスピーシーズ民族誌の視点に基づいて書かれている。人の観点に依拠した一般的な民族誌とは異なり、マルチスピーシーズ民族誌では、人以外の存在の観点や体験を取り入れた分析がなされる。本書では、クジラと人を取り巻く事項を通じて考察が進められている (3 頁、18-20 頁)。アラスカでは、捕鯨が、人々の身体的のみならず精神的な生存に不可欠である上、クジラと人の関係性が文化や社会の中核を成している点を考慮すると (9 頁)、榊原がこの技法に着目したことにも頷ける。イヌピアットの人々が、資本主義を始めとした世界全体の動きから切り離された存在として理想化されず、現実的に描写されたことが、本書の特筆すべき点だと筆者は考える。その様子は、捕鯨に関する記述にも表れている。榊原によれば、営利的な活動は、現代のイヌピアット社会における生存捕鯨の一部を成す。捕鯨の存続には、船の維持費や燃油代を含む多大な資金が必要である。即ち、伝統的な生存捕鯨は、近代的な経済活動に支えられて成立するのである (9-10 頁)。

本書は、序章、1 から 5 章、および終章によって構成されている。序章には、イヌピアットに関する基本情報と共に、マルチスピーシーズ民族誌の技法がまとめられている。榊原は、気候変動が人々の感情や文化にも影響することを指摘している。さらに榊原は、本書の目的を、先住民族が気候変動に適応し、文化を存続させてゆく強さや柔軟性を、主にホッキョククジラの生と死の過程、即ちイヌピアットの捕鯨を事例としながら描くことだと述べている (25-26 頁)。また序章では、人とクジラの親密性を示す言葉として榊原が考案した *cetaceousness* という用語が示されている。*Cetaceousness* は、クジラ目 (*cetacean*) の形容詞である *cetaceous* と、意識もしくは自覚 (*consciousness*) を合わせた造語である (12-13 頁)。榊原は日本語訳を示していないが、「クジラの存在が常に意識の中にある状態」といった表現になるだろうか。*Cetaceousness* は、イヌピアット文化の中核を成すとともに、主権に関する議論にも直結する概念である。現在の米国領内では、植民

支配に基づく歴史のほかに、個人や集団としての先住民の在り方の一部を連邦政府が規定するという構造の影響もあり、先住民のアイデンティティに関する議論は複雑であり、時に集団としてのまとまりを保つことが難しい。そのような中で、集団的な団結が求められる折に、cetaceousness を共有する者としての意識がイヌピアットの人々を繋ぎとめることを、榊原は指摘している (17-18 頁)。

第1章では、イヌピアットによる捕鯨の現状や、捕鯨を中心とした季節のサイクルなどが、写真を交えて解説されている。第2章には、気候変動が、捕鯨を基とした季節のサイクルに与える影響が述べられている。続く第3章で論じられているのは、1971年制定のアラスカ先住民土地請求処理法 (Alaska Native Claims Settlement Act)² の影響である。同法によって、アラスカには、200を超える先住民の地域会社 (village corporation)³ が設立され、土地、文化、経済活動が一体となった集団的アイデンティティが生み出された (89 頁)。また、同法によって、イヌピアット社会には、西洋社会の親族関係に依拠した利益の分配構造がもたらされると共に、彼らは自然資源の開発を基にしたグローバルな経済活動に参入することとなった (92 頁)。このような変化を前にして、捕鯨は、主権を回復し、コミュニティを復興する役割を担った (97 頁)。同章には、捕鯨にまつわる国際会議で、アラスカの諸先住民族が活躍する様子も描かれている (97-101 頁)。第4章には、海面上昇に伴った内陸部への集落の移転の過程と共に、ストーリーテリングの社会的役割が述べられている。移住に伴う人々の喪失感の緩和に、物語が役立ったのである (132-33 頁)。本章には、植民者のもたらしたキリスト教が、イヌピアットの社会に根付いた点も示されている (142-49 頁)。第5章では、イヌピアットの音楽や踊りがクジラとの関係性の中で論じられ、楽器製造におけるクジラの革の代替素材に関する議論や (172-73 頁)、人々の気候変動への適応に音楽が貢献していること (182-83 頁) も論じられている。

終章では、本書の題にもなった「クジラの雪 (whale snow)」という言葉についても解説されている。イヌピアット文化では、春の雪は、クジラが人に捕獲された際に降ると考えられている。喪失体験による悲しみや、気候や社会の変動による不安に晒されつつも、季節は廻り、人々は癒しや希望を見出しながら、クジラとつながりを持った生活を続ける様を表すものとして、榊原がこの言葉を題に選んだことが示唆されている (189-90 頁)。全てのクジラが消滅してもイヌピアットはアラスカで暮らすのか、海面上昇が進んだらイヌピアットはどこに行

くのか、という榊原の問いに、あるイヌピアックが「誰にも分からない」と答えたという逸話も、終章の末尾に掲載されている(193-94頁)。しかしそれは悲観的な言葉ではなく、いかなる状況でもイヌピアックとして生き抜くという強さを秘めた言葉として響く。

米国の連邦政府の先住民政策は、イヌピアット文化や社会に困難をもたらしたが、人々はそれを何とか切り抜けてきた。一方で、現在クジラを脅かしている地球全体の温暖化や海面上昇、北極海航路を往来する船の増加等には、米国内に限らず、日本を含む世界各地の人々が関与している。クジラが脅かされ、気候が変動する事態は、イヌピアットの文化や社会にとっては危機を意味する。彼らの苦しみの間接的に加担している米国内外の人々は、イヌピアットの適応力や強さに頼るばかりでなく、彼らの事情について学び、自らが関与する物事を変えていく必要がある。本書が世界各地で読まれることは、変化の一助となり得るのではなかろうか。

Notes

1. The University of Alaska Fairbanks, Alaska Native Language Center, “Inupiaq,” <https://www.uaf.edu/anlc/languages/inupiaq.php> (2021年8月22日閲覧)。
なお、イヌピアットやイヌピアックは *n* を使って綴られることもあるが、アラスカ北部の方言では *ñ* が用いられる(同上)。榊原はアラスカ北部のコミュニティを調査地としているため、*ñ* を用いていると考えられる。
2. 同法の日本語訳は複数存在する。本稿では、アラスカおよびカナダ北部の先住民に関する研究を実施してきた文化人類学者の岸上伸啓の訳を用いた。(岸上伸啓「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタックについて——祝宴における共食と鯨肉の分配を中心に」『国立民族学博物館研究報告』37(3)、2013年、396頁)。
3. 同上。